

オンラインによる自律的な学びをめざした研修デザイン

ータイ中等教育機関の教師研修「NBU オンライントライアル」の実践ー

ナリサラー トンミー・早川直子・プラパー セントーンスック

1. はじめに

国際交流基金バンコク日本文化センター（以下、JFBKK）ではタイの中等教育機関で日本語を教えているタイ人教師の日本語能力向上を目的として、学期間休暇の4月と10月に約1か月にわたり集中研修を実施している。この「日本語ブラッシュアップ集中研修」（以下、NBU）は2015年に開始され2019年の4月で8回を数えた。開始当時はタイ教育省基礎教育局との共催で公立中等教育機関の教師のみを対象としたが、2017年10月から共催ではなくなったことにより公立学校以外の日本語教師の参加も受け入れている。第8回までの参加延べ人数は181名である。

タイの公立中等教育機関では日本語を初級終了レベルまで教えることが珍しくなく、中には日本語能力試験 N4認定を有する生徒もいることから、NBU で目標とする日本語レベルは JF 日本語教育スタンダードの A2/B1レベルに設定している。NBU では研修修了後、参加者に日本語能力試験 N3の受験を求めており、合格するまで初回参加時から3年以内であれば3回を上限として再度研修に参加することを認めている。約1か月間、全国の高校教員がバンコクに集まって学び合う NBU は教師たちの学習動機を高め、非常に好評であった。

しかしながら、2020年4月に予定していた第9回は新型コロナウイルス感染症の拡大にともない中止せざるを得なくなった。参加が内定していた16名の教師に中止を知らせるタイミングで、報告者らはこの状況がかねてより希望していたオンライン化を試す好機ではないかと再考し、研修をオンラインで試行することにした。ただちに、1か月の集合研修から2週間のオンライン研修向けにシラバスを改変し、内定者に参加の意思と参加可能期間を確認した。その結果、半数の8名から参加の希望があり、第9回 NBU はオンライントライアル研修として4月第4週に実施することに決まった。

本報告は短期のオンライン研修となった第9回 NBU の概要、さらには自律的な学びをめざした研修デザインの特徴とその成果について述べるものである。

2. NBU オンライントライアル概要

2.1 研修の目的

NBU オンライントライアル（以下、本研修）は、日本語能力の向上、および自律学習の習慣を身につけることをめざし、以下の3点を目的とした。

- 1) 日本語の運用能力を高めること
- 2) JF 日本語教育スタンダード A2/B1 (N3相当) レベルの漢字・語彙・文法の意味・用法を学び、今後の学習につなげるイメージを持つこと
- 3) オンライン学習によって、自分でリソースを使って意味を調べるなど、自律学習を意識した日本語学習ができること

1) と2) は従来の NBU でも目的とされてきた。しかし、今回のような短期研修では大きな日本語能力の向上は望めないことから、2) の各科目において、知識だけでなく主体的な学びへの気づきを得ることも目的とした。そして、その主体的な学びが継続的な学びへ向かい、参加者の日本語能力を高めていくことを期待した。また、オンライン授業に関しては、インターネット回線の安定性や参加者の集中力の持続性を考慮し、時間をおさえる必要があった。そのため、3) を目的に加え、自習の時間を研修日程に組み込み、講師が提供する学習リソースを利用しながら目標に向かって自分の学習をマネジメントしていく自律学習の環境を整えた。

2.2 研修内容・期間

本研修は2020年4月13日（月）から24日（金）の2週にわたって実施した。図1に示すように、1週目（4月13日～19日）はガイダンスと予習のための自習（以下、自習（予習））期間、2週目（4月20日～24日）はオリエンテーション、授業、ふりかえり、フォローアップインタビューをおこなった。全日程をオンラインで実施し、講師である報告者も含む全員が自宅からの参加となった。

第1週	4/13(月)	4/14(火)	4/15(水)	4/16(木)	4/17(金)	4/18(土)	4/19(日)
10:00~11:30	ガイダンス	ガイダンス★予備日	自習(予習)	自習(予習)	自習(予習)	自習(予習)	
11:30~	自習(予習)	自習(予習)					
第2週	4/20(月)	4/21(火)	4/22(水)	4/23(木)	4/24(金)	4/25(土)	4/26(日)
9:00				9:00~12:00	9:00~12:00		
10:00	10:00~11:30	10:00~12:00	10:00~11:30	宿題のフィードバック	フォローアップインタビュー		
11:00	オリエンテーション	文法	漢字				
Lunch							
14:00	14:00~15:30	14:00~15:30	14:00~17:00	14:00~15:30			
15:00	語彙	会話	宿題★17時までに提出	研修のふりかえり			

図1 NBU オンライントライアル日程

本研修が目標とする日本語のレベルは、先述の通り、JF 日本語教育スタンダード A2/B1レベル、日本語能力試験 N3程度に設定した。学習科目は漢字、語彙、文法、会話の4科目とし、「漢字」、「語彙」は意味、「文法」は用法を理解して文の中で適切に用いること、「会話」はコミュニケーションのための会話力を強化することを目標として定めた。そして、どの科目も少人数でのグループディスカッションを取り入れ、オンラインでありながらも他の参加者と協働し、より豊かな学びや主体性が得られるようにした。

教材は、語彙と文法は市販教材を参考に作成し、漢字は N3程度の漢字を選んで自作した。会話は『まるごと 日本のことばと文化』（国際交流基金 2015）（以下、『まるごと』）の初中級レベルである A2/B1の教材を使用した。

2.3 使用ツール

すべての参加者と連絡が取りやすいこと、参加者が自習用教材に確実に取り組めること、オンライン授業がスムーズに提供できることを考慮し、以下の3つのツールを選定した。

- 1) Slack⁽¹⁾：チームコミュニケーションツールであり、ワークスペースを提供するウェブサービス。本研修では、学習管理システムとしての利用（連絡、教材の配布、課題の提示、提出、課題へのフィードバック）、参加者と講師のコミュニケーション、講師間の連絡などで使用した。
- 2) Quizlet⁽²⁾：オンライン学習ツール。単語カードやクイズなどが簡単に作成でき、学習者は教材にアクセスし、何度でも練習に取り組むことができる。本研修では参加者のための予習・復習教材として使用した。
- 3) Zoom⁽³⁾：複数人によるクラウドコンピューティングを使用した Web 会議サービス。本研修では、ガイダンス、オリエンテーション、授業、ふりかえり、インタビュー、講師間の打ち合わせなどで使用した。

2.4 担当講師

JFBKK のタイ人専任講師2名が語彙と文法、派遣専門家1名が漢字と会話の授業を担当した。本研修がトライアルということもあり、各講師は担当以外の授業にも全て参加し、見学ならびにサポートをおこなった。

2.5 参加者

本研修の参加者8名は全員タイ教育省所属校の教師で、そのうち6名が日本語パートナーズ⁽⁴⁾派遣校のカウンターパート（7期：4名／8期：2名）であった。バンコクとその近郊から2名、

東北部から5名、東部から1名が参加し、年齢は23歳から35歳までと幅広く、教授歴もさまざまであった。経験の浅い若手教師が7名（1年：5名／2年：1名／3年：1名）、そして、経験が5年という1名は2018年に実施した第6回 NBU にも参加した再受講者であった。参加条件として求めている N4程度の日本語能力レベルについては、全員が条件を満たしており、日本語能力 N4 認定者が6名、オンラインテストで N4相当の日本語能力を証明した者が2名であった。

3. 研修デザイン

「2.1 研修の目的」でも述べたように、研修終了後も自律的な学習を継続させるねらいから、まずは研修中に主体的な学びを経験することが必要とされた。下図は本研修の流れであるが、1週目は主体的な学びを通して自律的な学習習慣を体験する「自習」の期間、2週目は講師による「オンライン授業」と「ふりかえり」の期間として、非同期型での自習（予習）とそれを前提としたオンラインによる同期型授業という反転授業の形態を取り入れることにした。

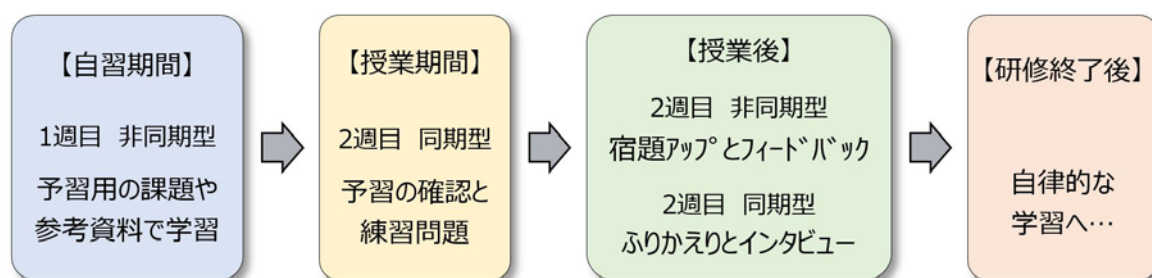


図2 NBU オンライントライアルの流れ

反転授業には授業の時間を有効に使うという目的もあった。各科目の授業時間数は1コマしかないうえに、オンライン授業では個別のフォローに時間をかけにくいことが想定された。授業時間を無駄にしないよう、本研修では予習を重視し、授業は予習を前提とした内容で進めることにした。この研修デザインにより、授業では運用のための時間をより確保できるとともに、参加者のパフォーマンスレベルの均一性も高められると考えた。

3.1 研修開始時のガイダンス

オンライン研修では事前の機材の接続・動作確認が必須となる。図1の研修日程にあるように、1週目の研修開始時に接続テストを兼ねて、研修の概要、自習（予習）に関するガイダンスを実施した。念のために予備日を設けていたが、初回に全員が参加できたので、予備のガイダンスはおこなわなかった。

3.2 1週目：「自習（予習）期間」－自習ができる環境づくり

教師がそばにいらなくても主体的・自律的に学べるよう、今回の研修では教材やその取り組み

せ方に工夫を試みた。学習管理システムとして利用した Slack には各科目のチャンネルを作り、チャンネル内に自習用教材を収めて参加者が各自のペースで予習ができるようにした。

各科目の教材については次で詳しく述べるが、「漢字」、「語彙」、「会話」は Quizlet で予習用クイズ教材を作成したあと、図3のように教材の URL を Slack の科目のチャンネルに載せた。参加者は満足する結果が出るまで何度でもクイズに挑戦していたようだ。

早川・石川・國頭（2020）は自律学習における教師の役割は取り組むべき予習・復習の教材や学習活動を提示しつつ、あくまでも自律学習の支援者として学習者に声かけをしたり、相談に乗ったりしながら見守ることであるとした。

報告者らも同様の働きかけを試み、予習への取り組みに対しアドバイスをしたり、提出物にコメントをしたりするなど、参加者とコミュニケーションを取りつつ予習を促すための支援を心がけた。以下は各科目で自習（予習）期間中に参加者に提示した教材である。

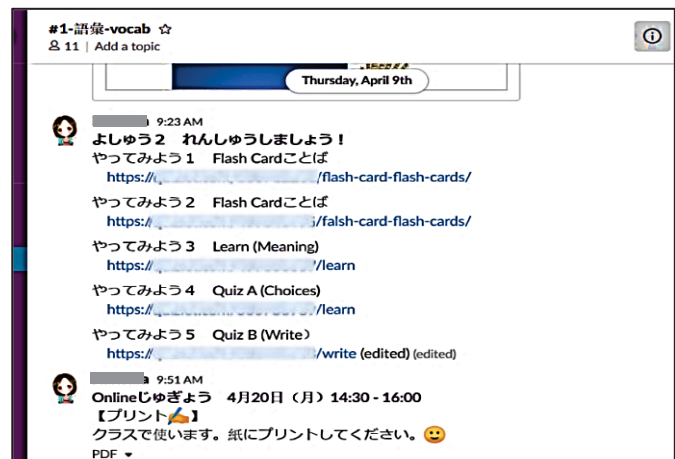


図3 語彙の予習課題の提示画面

3.2.1 語彙

Slack の「語彙 - vocab」チャンネルに、①予習シート、②Quizlet の URL、③授業用シートの自作教材3点をアップロードし、授業までに①と②に目を通し、練習しておくよう連絡した。

3.2.2 文法

Slack の「文法 - grammar」チャンネルに、2課分の①予習用文法ノート、②予習用文法ノートのことば、③予習用練習問題をアップロードした。自習（予習）期間の最終日に③予習用練習問題を提出してもらって採点した。予習で理解できた文型と理解できな

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
1	問	文型	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん	Gさん	Hさん
2	1 ため		○	○	○	×	×	×	×	×
3	2 によって		×	×	×	×	×	×	×	○
4	3 によって		○	○	○	○	○	×	○	○
5	4 から		○	○	○	○	○	○	○	○
6	5 から		○	×	×	○	×	○	○	×
7	6 せいで		○	○	○	○	○	○	○	○
8	7 おかげで		○	○	○	○	○	○	○	○
9	8 んだから		×	×	×	○	○	○	○	○
10	9 ので		○	×	×	×	○	○	○	×
11										
12										
13										

図4 文法の予習課題の採点結果

かった文型を事前に把握し、授業で優先的に扱う文型を決めた。

3.2.3 漢字

Slack の「漢字 - kanji」チャンネルに、①予習用漢字リスト、②Quizlet の URL、③授業用シート、④N3漢字一覧〔参考用〕をアップロードし、授業までに①と②に取り組むよう参加者に伝えた。

3.2.4 会話

Slack の「会話 - marugoto」チャンネルに、①予習用『まるごと』語彙リスト、②予習用『まるごと』漢字語彙リスト、③Quizlet の URL、④教材 URL〔授業用〕をアップロードし、授業までに①～③で予習しておくよう連絡した。

3.3 2週目：「授業期間」「ふりかえり」—オンライン授業と学習支援

2週目から同期型授業を開始した。開始時のオリエンテーションでは、研修目標の確認、2週目の予定、内容などの説明に加え、Zoom のブレイクアウト機能を使った小グループでの自己紹介、1週目の自習（予習）期間に得られた学び方への気づきの共有等の活動をおこなった。また、受講中のルールとして、参加者は疑問があればいつでも質問してよく、それに対する答えは講師からとは限らず参加者からでもかまわないとし、参加者間での学び合いも奨励した。

3.3.1 語彙

授業の最初で「予習シート」の問題の答え合わせや、意味と用法の確認を小グループでおこなうことで、ことばの意味と使い分けに対する理解を深めた。続いて、各自で授業用シートの問題を解き小グループで答え合わせをしたあと、最後に講師が全体に向けて解説をした。授業後は宿題を課し、理解度に応じて個別にフィードバックをした。

3.3.2 文法

予習用練習問題の答え合わせをすることで理解を固めた。事前の採点で講師は正解者を把握しているので、正解者にその答えを選んだ理由を説明してもらう方法で授業を進めた。参加者は自分がいつ指名されてもいいように集中していた。そして、指名されても自分は正解しているとわかっているため自信をもって解説できた。授業後には復習用練習問題を宿題とし、予習用練習問題の結果と比較して主に理解が不足している項目についてフィードバックをした。

3.3.3 会話

授業は『まるごと』を使用し、トピックに関するスキーマの活性化、Can-doの確認、聞く練習、話す練習をした。話す練習では「ブレイクアウト」機能を使い、小グループに分かれて練習した。授業

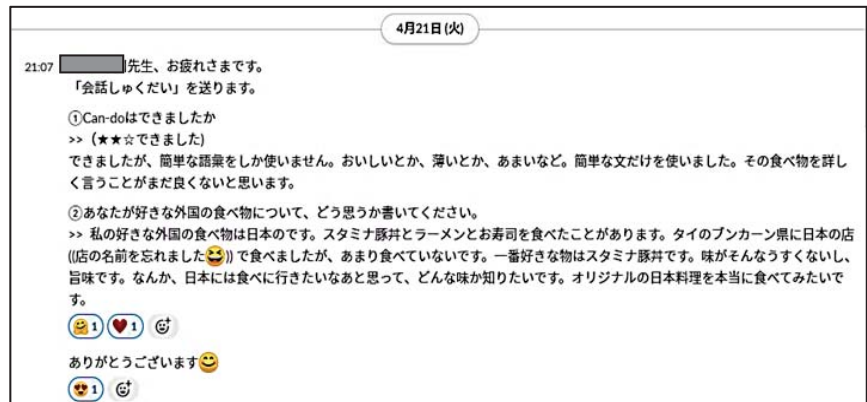


図5 会話の宿題提出の様子

後は図5のように、Slack に①Can-do チェックによる自己評価、②話す練習の時に話した内容を提出してもらった。フィードバック時には自習のために『まるごと』の関連サイトを紹介した。

3.3.4 漢字

授業では予習した漢字を練習シートで確認した。まず、問題を解いてから、漢字の書き順を確認して書く練習をした。授業後は Slack に①宿題シート、②授業の練習問題の解答、③復習用 Quizlet の URL をアップロードした。図6はある参加者による課題の提出画面であるが、手書きの文字であっても撮影したものを添付ファイルで提出することによって表記の正しさを確認することができた。

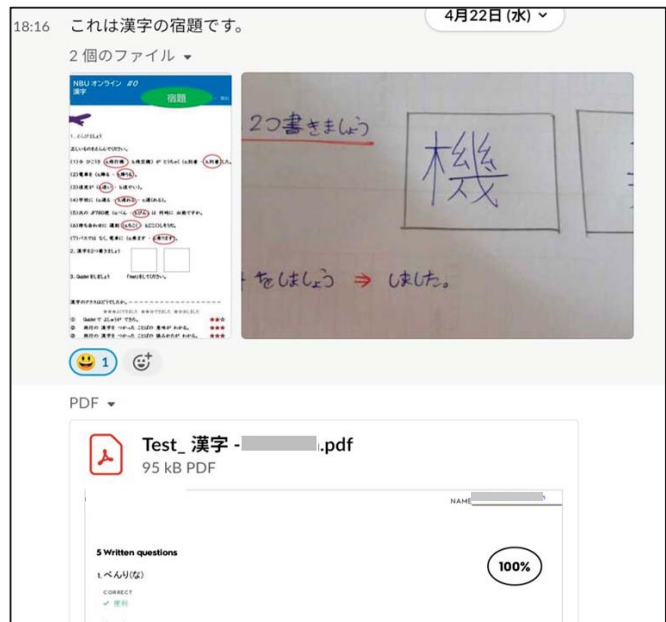


図6 漢字の宿題提出の様子

3.4 宿題・フィードバックによる学習支援

授業終了後は学習内容を整理したり理解を確かめるための宿題を課し、参加者はいつでも講師にサポートを求めることができるようにした。宿題へのフィードバックでは正解を明らかにせず、解き方のヒントやストラテジーをアドバイスするだけにとどめ、参加者が自ら答えを導き出せるまで何度でも繰り返した。

4. ふりかえりシートからみえる参加者の反応

JFBKKにおいて初めてのオンライン研修であった本研修を分析するにあたり、図1にある「研修のふりかえり」を実施し、この時間に「体験ふりかえりシート」に記入してもらった。このシートはGoogle formで作成し、研修全体への満足度、研修の内容、ツールや期間、今後の実施希望、感想・コメントの5つについてふりかえってもらった。

右図の「1. NBU オンライン研修全体について」にある通り、研修への満足度については100%満足という回答が得られた。

「2. NBU オンライン研修について」で研修の内容に関してきいた。「自習の効果は実感できたか」、「授業の効果は実感できたか」、「教師のサポートへの満足度」のそれぞれについては100%が「実感できた」、「満足」と答えた。自習（予習）期間の効果は「予習でわかっていなかった部分を発見できた」、「授業内で理解できていないことが確認することができた」というように理解を深める効果があったと参加者が感じていることがわかった。「他の参加者教師とのやり取りの有無（授業以外）」については8名中3名、37.5%が「ない」と回答した。さらに、「オンラインによるストレス／心配だった点」を自由に記述してもらったが、全員が「ない」と答えた。

次に、「3. オンライン研修のツールや期間について」の「研修期間は適当か」では、「適当である」が37.5%、「やや適当である」

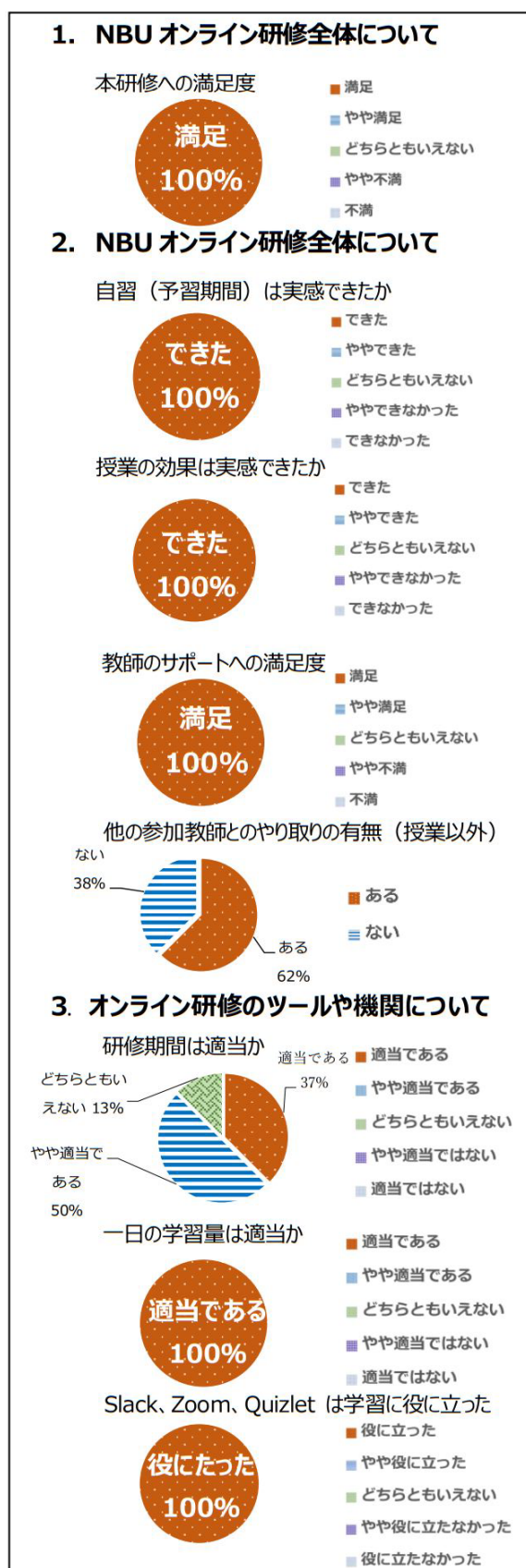


図7 「体験ふりかえりシート」項目1から3の結果

が50%を占めた。「もっと勉強したい」、「授業期間を2週間にしてほしい」という意見が書かれており、次回は期間を延ばす、または内容を増やすことを検討してもよさそうだ。続いて、「一日の学習量は適当か」、「Slack、Zoom、Quizlet は学習の役に立ったか」という項目には、それぞれ全員が「適当である」、「役に立った」と回答した。コメントには「自分のための勉強にも役に立つし、自分の授業に生かすこともできる」、「3つのツールは情報共有がしやすいです。コミュニケーションも情報共有もしやすい。学習内容も復習できて対面授業のように学べた」と書かれていた。

そして、4つ目の項目「今後の実施希望」には全員が希望すると回答し、日本語能力試験対策、文法、聴解、会話、教授法に関する授業の需要が高かった。最後の5つ目の項目「感想・コメント」には同様の意見とともに本研修を継続してほしいという要望も書かれた。

5. フォローアップインタビューからみえる研修成果

「体験ふりかえりシート」の記述から掘り下げたい項目をいくつか選んで参加者全員を対象にフォローアップインタビューを実施した。下記にインタビューで参加者から聞き取ったこと、および内容から報告者が考察したことを述べる。

5.1 自習（予習）の効果

研修の1週目を自習（予習）期間とし、それが2週目の授業にどのように影響したかを聞いたところ、「予習をせずに授業に参加するよりも理解が深まった」と複数名が述べた。自習では理解できなかった項目を授業での講師とのやり取りの中で確認、質問できたという。

今回は短期研修での学びを継続的な学びにつなげたいという目的で、自律的な学びを体験する自習（予習）期間を重視し、「予習で学び、授業で確認・練習をする」研修デザインを試みた。自習（予習）期間で理解できたこと、理解できなかったことを事前に自らが把握することで、翌週へのレディネスが整い安心感が得られたこと、また、時間に縛られることなく自分のペースで学習を進められることも授業への動機を高める効果があったのではないと思われる。

5.2 自習（予習）を前提とした授業の効果

授業について聞いた結果、「授業では講師が学習内容を説明したり学習方法を指導したりしてくれたため、もっと努力したくなった」、「あまりよくできていないことをどのように学んだらいいかアドバイスしてくださった」というコメントのほか、「オンライン授業で学び、友達と意見交換するためには予習しておかなければならない」というコメントもあり、授業参加が自習の動機づけになっていたことが明らかになった。実際に、参加者は自習で学んだことを授業に持ち寄って、教え合い、意見を交わしながら学びを深めているようだった。

5.3 参加者同士の交流

「体験ふりかえりシート」で授業時間外にも参加者間でのやり取りがあったかどうかをきいた。「ある」と回答した参加者らは大学時代の知人同士、過去に同じセミナーに参加していた者同士で、自習（予習）期間から課題の理解確認や答え合わせなどで連絡を取り合っていた。このように、知り合い同士は全期間を通してやり取りしていたことがわかった。

インタビュー時に、参加者間の交流を促すオンライン活動のアイデアをきいてみたところ、「授業後の宿題を共同で取り組めるものにしてはどうか」、「交流を深めるためにお昼ご飯の時間もオンライン接続したらどうか」などの有益なコメントが得られた。そして、思いがけないことに、参加者からの声かけにより勉強会が立ち上がり、研修終了後も交流が続いている。

5.4 教師目線での参加

参加者は受講生であると同時に教師でもあり、コロナ禍におけるオンライン授業、ツールの使用、教材作成を自分事として捉え、自分の授業にも取り入れたいと述べた。ある参加者はタイの中等教育機関で選択科目として日本語を学ぶ教材『こはるといっしょに にほんごわあ〜い』（国際交流基金バンコク日本文化センター 2012a, 2012b）（以下、『こはる』）のクイズをQuizletで作成し、コロナ禍の生徒たちの日本語学習を支援した。その後、クイズをほかの研修参加者にも共有し、『こはる』シリーズのクイズを作成するメンバーを募った。このような活動がタイの日本語教育への貢献につながればと願う。自らが主体的に学ぶだけでなく、生徒のために主体的に活動を起こす動きが生まれたことは喜ばしく、今後も参加者やその活動を支援していきたい。

6. まとめと今後の課題

体験ふりかえりシートやフォローアップインタビューの結果から、1週目を自習（予習）期間に、2週目を授業期間とする研修デザインは好評であったことがわかった。Slackを使用した非同期型自習（予習）で授業の参加準備をし、その後同期型授業で知識を運用するという流れは、主体的な学びをメインとし、時間を有効に使いたいオンライン学習に適しているといえる。

自習（予習）は翌週の授業への動機づけ、さらに言えば研修後の自律的な学びにもつながるカギとなる大事な過程である。そして、予習期間を含め全期間を通して、参加者の理解度に応じた個別支援や主体的な学びを促すコミュニケーションを心がけるのはもちろん、参加者間の交流にも配慮していかなければならないことを実感した。

急ぎよ実施したトライアル研修であったが、参加者の協力的な姿勢や教師としての多角的な視点による気づきによって、教師の役割、授業の進め方、ツールや教材の使い方、参加者間の交流など、今後検討しなければならない点へのヒントやアイデアが多く得られた。

今回興味深かったのは、文法の授業で実践した「予習用練習問題の正答者の解説を交えながら授業を進める」という学びの形が研修終了後に参加者が立ち上げた勉強会にも受け継がれたことである。自らが選んだ教材を Slack でシェアし、各自で問題を解いて採点を済ませてから、授業と同じように正答者が交代で解説するという学びの場が生まれている。

参加者による勉強会や教材作成の活動は、本研修の目的でもあった主体的な学びや教えを象徴するものとなった。コロナ禍において、参加者は日本語使用の機会、情報交換の機会を切望しており、今回の主体的かつ協力的な参加姿勢からオンライン教師研修のさらなる可能性を感じた。「NBU オンライントライアル」は報告者と参加者が気づきを与え合い一緒に作り上げた研修であるといえる。

〔注〕

- ⁽¹⁾ チームコミュニケーションツール。Slack の概要について以下のウェブページを参照のこと。
<<https://slack.com/intl/ja-jp/>> (2020年8月20日)
- ⁽²⁾ オンライン学習ツール。Quizlet の概要について以下のウェブページを参照のこと。
<<https://quizlet.com/>> (2020年8月20日)
- ⁽³⁾ クラウドコンピューティングを使用した Web 会議サービス。Zoom の概要については以下のウェブページを参照のこと。
<<https://zoom.us/>> (2020年8月20日)
- ⁽⁴⁾ 日本語パートナーズは、国際交流基金アジアセンターの人材派遣事業であり、アジアの中学・高校などの日本語教師や生徒のパートナーとして、授業のアシスタントや日本文化の紹介を行う人材を送り出している。日本語パートナーズは現地の日本語教師をカウンターパートとして活動する。タイにおいては2020年現在第8期の実績がある。

〔参考文献〕

- 国際交流基金 (2015) 『まるごと日本のことばと文化』(初中級 A2/B1)、三修社
- 国際交流基金バンコク日本文化センター (2012a) 『こはるといっしょに にほんごわぁ〜い 1』、泰日経済技術振興協会
- 国際交流基金バンコク日本文化センター (2012b) 『こはるといっしょに にほんごわぁ〜い 2』、泰日経済技術振興協会
- 早川直子・石川晶子・國頭あさひ (2020) 「EPA 候補者へ向けた自律学習支援の取り組み―第8期フィリピン訪日前研修の実践から」 神村初美 (編) 『介護と看護のための日本語教育実践：現場の窓から』、174-194、ミネルヴァ書房